

〔特集〕 わが国の父親と親役割

## 1. 「父親不在」が家族にもたらしたもの

大東文化大学文学部教育学科

井原成男

### I はじめに一父親を論じる視点

子どもの心理的な問題の解決のために、家族に会う中で、我々臨床家が会おう事実は、もともと母親から得られるものが多かった。そこから得られる事実は、周知のように、初期の母親の子どもに対する影響がいかに大きく、また後々まで影響を与えるかということであった。こうした事実から相互に影響される形でまた、児童心理学や発達心理学も、こぞって子どもの発達の初期の解明に向かった。現在の問題の原因は必ず初期にあり、その原因について解明することが、現在の問題を解決し、ひいては問題の予防に繋がると考えられたのである。こうした一連の流れを、分析的な態度と呼ぶことができるだろう。

しかし、我々は母親達に会う中で、当然のこととはいえ、母親は万能でないことに気付いていく。子どもの初期に絶大な影響を与えるこの母親が、問題の発生の必要十分条件となるためには、その背後の問題－父親に代表されるような家族や社会的な問題が重ねて存在していることが必要であることに気付いたのである。むしろ問題は、逆の順序に起こっている。社会的な諸問題が父親達に十分に受け止められずに家庭の中に持ち込まれ、またこの問題を、父親的なものが守り、解決を提示する機能が阻害されていること、そもそも、そういう家族関係が家庭の中に存在していないことが、母親と子どもの問題を複雑にし、また母親に過重な課題を与え、いわゆる「母性」の発現を阻害しているということなのではないか。そうした思いから、我々は父親の存在に注目するのである。

これはまた、問題の分析ではなく、問題が存在するのなら、それをどんな風に解決すればいいかという、我々の臨床的な態度とも関連する(私はそれを「育て直し」という方法に集約する試みをおこなった<sup>1)</sup>)。問題や原因の指摘ではなく、この家族に欠けているものを創生するには何が必要なのかという態度である。それを統合的な態度と呼ぶことができる。そこには、家族を最後の砦とする、最終的な戦いが存在しているのである。

父親は、単に生物学的な存在ではなく社会的な発明であるという根強い説がある<sup>2)</sup>。この説を積極的にとらえるならば、この説は、父親において、その生物学的な側面のみでなく、社会学的な側面がとりわけ重大になるということを示している。社会的な機能はひとり父親だけが担うものではなく、母親にも要求される。父親が社会的機能を十分発揮することは、母親にも母親としての社会性を目覚めさせる。学校の問題ひとつとつても今日、社会的な問題をいわゆる「母性」と呼ばれる機能だけで解決することは不可能である。しかし現実には、子どもの学校問題に、もつとも早く気付く位置にいるのは母親である。こうした事態でその家族に、父親と母親が社会的な問題について、十分に話し合える機能が備わっているなら、父親の社会的機能が十分発揮され、社会での荒波に対処している父親本来の、人間としての生き方が問われる。それは父親に、父親として成長するチャンスを与える。そのことがまた、母親の社会的機能も促進するのである。

パーソンズは父親の役割を「(家族を社会に結び付ける)道具的役割」と呼び、母親の役割を「(組織を円滑に維持する)表出的役割」と呼んだ<sup>3)</sup>。しかしこの

機能は互いに固定的に限定されるものではなく、お互いに刺激し合うことでその欠点を補い、高め合う役割であると、積極的に考えたい。

ミッチャーリヒ以来<sup>4)</sup>、父親の権威の失墜が指摘されて久しい。「父親なき社会」という語は、1919年のフェダーンの著書に既に現れているというから<sup>5)</sup>、その歴史は昨今のことではない。元来父権が強く、権力の継承が父親を通じてなされ、父親が権威をもつ社会が変化していく中であつて、むしろそれは当然の出来事であつた。我々が求める父親とはこうした、かつて権威をもっていたに違いない「幻想の父親」ではない(父性の復権<sup>6,7)</sup>)という物言いは、かつて母性に幻想を求め、現実の母親達を苦しめた、マザー・コンプレクスの裏返しとしての「母性幻想」と同じ轍を進むと思われる。ただし、父親は社会的な権力と結び付きやすいので、事は一層厄介である)。

我々がここで求めているのは、現実の家族の観察に基づく、新しい父親像である。その父親とは多分、我々が今まで誰も経験したことのないものであり、家族というこの掛け替えのない、そして限りなく強靱で可塑性のある集団ユニット(それゆえにこんなにも長い間生き延びてきた集団ユニット)を蘇生させ、それを基に、これからの社会の雛型を提供するものになると考える。

こうした視点から、移行対象からわかる父親の機能と、母親の機能への無理解、そして思春期やせ症の比較的長期に見たケースに見られた父親不在の意味について見たい。

## II 移行対象からみた父親の機能<sup>8)</sup>

移行対象とは、乳児や幼児が執着する毛布やぬいぐるみなどの無生物(ペットなどの動物もここに入れて考えることもある)で、スーザーとしての役割をもち、その存在によって分離の不安を静めるものである。それは、初期の理想化された母親の象徴であり、子どもが母親から自己を分離したものとして見られるようになり、最初の分離不安が問題になる1歳

前から出現する。これはまた母親の代理物として機能し、また母親の象徴として心の中に内化される。いわば、いつも一緒にいてほしい理想的で幻想的な母親と現実の母親を繋ぐために、幼児が、その想像力を駆使して創造した発明品—工夫の産物である。つまりこれは、優れて母親の持つ母性的な機能を見せてくれる現象なのである。

表1から3に自験例5例に現れた移行対象の特徴についてまとめた。

表1から全てのケースに共通していえるのは母親の態度が、いわゆる母性的な機能を発揮できないことである。それは父親が、個人的な性格的理由または社会的な理由で、十分に母親を支える機能を発揮できていないことによる。この場合、治療者の役割は、疑似的な父親として母親を支え、母性が発揮できるように母自身を育て、さらに父親の治療への参加を促すことで、母子の関係が修正されるプロセスを促進することになる。これは個々人に単独に起こる心の変化を促すだけでなく、環境の側の変化に応じて、敏感な子ども(表2)にも心の変化をもたらし、結果として家族相互の関係が変化していく。このプロセスは一言で言い尽くせない絶妙の変化を生み、欠陥のあつた家族を、新しい家族に変化させる。このプロセスに付き合い、新たな家族の誕生を見るのは、どんな小説を読むよりも面白く<sup>9)</sup>、また家族のもつ蘇生能力を実感させて、治療者冥利に尽きる。表3から移行対象が、母親には理解しやすい母性的な側面をもつが、父親がこの側面をいかに理解しにくいかが見てとれる。しかしそれとて家族関係の変化の中で、程度の差こそあれ、父親にも理解可能になる。父親にとつても母性を理解することは、夫婦という男女の相互理解のために不可欠であり、そこから真の父性も育つのである。

## III 思春期やせ症からみた父親不在の意味

思春期やせ症は限りなく、父親とは何かを、父親と娘という関係から教える。表4から5に自験例5例

表1. 移行対象が治療中に現れた5ケース(1) (井原, 1986)

ケース	性	初診時年齢	家族	移行対象	指しゃぶり	母の態度	父の特徴
1	男	7 (登校拒否)		ぬいぐるみ (レッサー・ パンダ)	—	きつい	神経症 (書癡)
2	男	10 (登校拒否)		ぬいぐるみ (レオ etc.)	—	せっかち	少年っぽい
3	女	9 (登校拒否)		猫 (すて猫)	—	不安定	おどおど
4	女	13 (ヒステリー)		犬 (座敷犬)	—	先どりする	単身赴任
5	女	13 (ヒステリー)		犬 (夢に現れたか つての飼い犬)	—	きびしい	忙しい

表2. 移行対象が治療中に現れた5ケース(2)

ケース	本人の性格	自我の強さ	IQ	人見知り	分離不安	反抗期
1	大人しい わがまま	±:弱い	中	+	-:分離場面なし	-
2	気にしやすい 集団になじめない	±:もろい	下	+	+:母が察知	±
3	無口・表現できない	-:表明されていない	中	±	?:はっきりしていない	-
4	人の評価を気にする, わがまま	±:固い	上	+	±:女性への不安	-
5	大人の顔色をみる, 神経質, お 天気屋, わがまま	±:固い	上	-	-	-

表3. 移行対象が治療中に現れた5ケース(3)

ケース	遊びの特徴	移行対象は誰によってもたらされたか	移行対象に対する母の態度	移行対象に対する父の態度
1	ひとり遊び (畑にて, ミニカーなど)	動物園にて母より	甘えん坊だと思 (やや許容的)	甘えん坊だと思
2	ひとり遊び (他児と遊べない)	旅行先にて父より	男の子なのにしょうがない	しかたないと思いつつ容認
3	ひとり遊び (環境的に)	誰からでもなく, すてられて いた+級友	しがみつく気持ちは分かる	母にいわれて分かる
4	男の子的 (活発, 木のぼりなど)	本人の希望で, 家族が決めた	これによって本人の気持ち がよく分かる	母に説明されしおしお納得
5	ひとり遊び (男の子的のもの, 組木, 時計 の分解など)	さびしいので母に買って もらった	さびしいと思つて与えたので よく分かる	母の説明によって納得

を, 父親との関連という観点からまとめた. 5例ともに5年から10年くらい継続して治療しているケースである. 思春期やせ症の定義や内容については成書に譲り<sup>1,10,11)</sup>, ここでは, この病気と父親との関連に絞って述べる.

本来, 食べるということは人間にとって, もつとも基礎的な事実であり, 喜びである. しかし, 思春期やせ症の子は, この喜びを享受できていない. それは, 太って醜くなることは自分の評価を下げてしまうという確信による. このことは, もともと思春期やせ症の子のもつ自己評価の低さと相俟って, 強迫的な食

事制限, ないしは過食後の嘔吐となって現れる. さらにこのことは, やせて美しいことがよしとされる現代社会の強迫に支えられて, 修正不可能な願望となってしまうのである. したがって, やせ症の治療の最終目標は, この本来の自然さをいかにして取り戻すかということになる. それが本質的な問いである. やせ症の家族の特徴を見ると, そこには, さまざまに, 食べ物に象徴されるような女性性の否定(料理や家事は劣った女のやることという考え)が見られる.

たとえば症例1の母親は, 女に学問はいらないと実父に勉学を断念させられたために, 自分の娘には

表4. 父親という観点からまとめた思春期やせ症(1)

ケース	性	初診時年齢	同居家族	父の特徴	父の実母との関係
1	女	13		もの言わぬ農民的タイプ 心理的な洞察は悪い。	女手ひとつで育ててくれた実母との癒着が強い。
2	女	11		人の間に入って調整したり、互いに関わり合うことができない オタク的なタイプ	見捨てられ不安と恐怖心が強い。
3	女	13		文学青年で、批判的な理屈屋。 妻には心の関わりというより、世話してもらっているというタイプ	実母を尊敬し、今でも食事の世話をしてもらっている。
4	女	14		マイペースで突き進む、独立思考で押しつけの強いタイプ	父を早く亡くし、母に女手ひとつで育ててもらっている。そのため独立志向が強い。
5	女	14		家族全員に軽蔑されており、家族と関わっていない。	末っ子で姉達から甘やかされて、依存的

表5. 父親という観点からまとめた思春期やせ症(2)

ケース	母の特徴	子どもは親の何を感じとったか	父親像	父と料理
1	女性性に欠ける。 学問を否定した実父にも、そして実母との癒着の強い夫にも不満をもつ。	父との結びつきが強い。 夫(父)への母の不満を感じとった。(自己抑制的)	父の父は幼い頃死亡(-) 母の父は拒否(-)	父が手打うどんを作ってくれた。 (父のプリミティブな形の愛)
2	末っ子で母自身の分離不安が強い。 実母に対抗できぬ夫に不満	母の姑との不仲、夫(父)への不満を感じとった。(世話役的)	父の父は妻に従い存在がない。 (+) 母の父は、母が末子で間に姉がいたため印象が薄い(+)	父が母-娘の料理作りに参加。 (子は栄養士になる。)
3	大家族で育ち、青年期に父を亡くしている。 家族の情緒的な繋がり方がわからない。	父の実母との結びつきの強さを感じとっていた。(自己抑制的)	父の父は家の柱になれず没落。 (+) 母の父は自殺により死亡(-)	父はグルメ志向。実母から料理という形での愛を受け継いでいる。 (娘はダイエットとしての自然食から、彼に料理を作る形に進む。)
4	実父を早く亡くし、また実母も盲目同然、兄は精神遅滞。 ひとの面倒を見続けてきた。	父(夫)に自分のやり方を押しつけられて、母がそれに不満であると感じとっていた。(世話役的)	父の父は幼い頃離別し不在(-) 母の父も幼い頃死亡(-)	料理は幼い頃からこの子の役割だった。 (父が時々、お鮭やケーキを買ってきてくれた。)
5	母は実父が好きであるが、実母を置き去りにした人(男)として、憎んでもいる。	母の夫(父)への不満に早くから気付き、自分を出せなかった。(自己抑制的)	父の父は善人で印象が薄い。 (+) 母の父はよそに女を作り不在がち(+)	父は家族との関わり方がわからないが、スイカを一年中買ってくるという形で愛を示した。 (子は大学で料理研究会に入る。)

その代償として勉学を奨励した。そして、食事に力を注ぐことは無意味なことだとして、食事は軽視し自らも、子どもとの二人三脚の勉学に励んだ。また、症例4の子は、父親の脱サラに母親も協力して多忙になったため、幼い頃から家事を分担させられ、料理は彼女の役割であった。そしてこの母親は自らも幼い頃に父を亡くし、さらに精薄の兄を世話し、盲目の母を世話しと、その生涯を他人の世話に捧げてきた。そのため娘の努力を正当に評価できず、ねぎらいの言

葉をかけることもなかった。娘の苦勞など当然と考えたのである。この母と娘にとって女性とは、他人の世話をし他人に食事を作る、そういう、押しつけられる存在なのである。

こうした女性性に対する否定的な感覚を培ったのは、いずれも父親という男性であった。この母親達は、本当は自らの女性性を否定するのではなく、そうした一方的な女性性を、「女子どものやること(劣っていて本当は誰もしたくないこと)」として押しつけ

た男性そのものへのアンチ・テーゼとすべきではなかったのだろうか。そこにしか、食べるという本来喜びのはずであったものや、真の女性性を回復する道はない。

思春期やせ症の病理を、メディア・コンプレクスという概念から理解しようという試みがある。これは、愛せぬ夫との間にできた娘を見捨てる心理であると説明される<sup>12)</sup>。しかし、ここに提示した症例から見ると、むしろそれは、敏感な娘が父親と母親の間にある軋轢や葛藤に気付き、その2人を結び付けようという心理として理解すべきではないかと考える。そのような目で見ると(表5)、子どもは、その程度はさまざまであるが、妻よりも実母の方に気を使い、恐れ、癒着している父親への母親の不満に敏感に反応し、その2人を調整するために、子どもであるにもかかわらず、世話をする人になったり、過度に自己を抑制し、いい子に振る舞うという過剰適応の状態になっている(ここにも家族を調整できない父親の姿が見える)。こうして子どもは、母親から(そして間接的には母親の父から)否定的な女性像を受け取り、また母親と両親やそれを取り巻く(母親と姑などの)関係によって、本当の自己<sup>8)</sup>を表明できない、過剰適応の子どもになったのである。

こうした父親の背景を見ると(表4, 5)そこに、父親が家族と関わっていないという特徴のあることがわかる。それは、①言語的な関わりが苦手であったり、②人と関わるのが苦手な自信がなかったり、③また逆に家族の都合ではなく自分の考えを強引に押しつけていたりなど、さまざまな形をとって表れている。その原因は、①父親自身がその実母と癒着していて独立していないために、妻の立場に立てない、②実母を恐れてまだその支配下にあるために自分の意見を表明できない、③逆に、女手ひとつで育てられ、父の轍を踏むまいと過度に自立的なために家族の意志でなく自分一人の意志で突っ走っているなど、さまざまである。しかしそこに共通するのは、家族全体を考えて行動している成熟した父親ではなく、自分のコンプレクスや葛藤、不安につき動かされて行動

している父親の姿である。こうした父を妻が支え、娘が補うという形になっている。

しかし、表5の父親像という項目からわかるように、父親自身、自分の父親が幼い頃死亡したり、たとえ死亡していなくても離別したり、ほとんど不在であったり、存在がなかったりという父親不在状態で育っている。また注目すべきことに、母親自身の父親も死亡したり、不在であったり、拒否したり、印象が薄かったりと、夫と同じように父親不在で育っているということである。つまり思春期やせ症の子の両親はともに父親不在の状態である。こうした状態で、安定した父親やよき父親の像が発達しないのは、むしろ当然である。思春期やせ症という重篤な病理の背景には、こうした父親の育てる機能の欠落が、追跡できるだけでも、3代前から起こっているのである。これが、この疾患の現実である。

こうした父親の不在が改善されていくプロセスについて、3代にも渡ってこれだけ欠落していたものを、改善という言葉では語れない。治療には長年の付き合いが必要であり、むしろ育てるという言葉が適当である。表5の右端に、父親と料理という項目をあげた。症例2の父親は、母娘の料理場面に参加する形で家族に参加し(それをこの家族はママゴトと呼んだ)、無趣味の父親が釣りを始め、収穫を家族に供するという形で、料理のもつ自然な喜びを、初歩的とはいえ具体的におこなうことで得ていった。さらに、やせ症の子にとって、父親が美味しいものを作り、買ってくれた記憶は、シンプルでプリミティブではあれ、心の底で、それなりの愛情として受け止められていることが明らかになった。ここでもまた、家族のもつ蘇生能力には驚くばかりである。

#### IV おわりに

普通、乳児期において子どもと関わるのは母親であり、父親の関わりは主にその後幼児期になってから始まると理解されている。しかしラムによれば<sup>13)</sup>、子どもと父親の関わりもまた乳児期から始ま

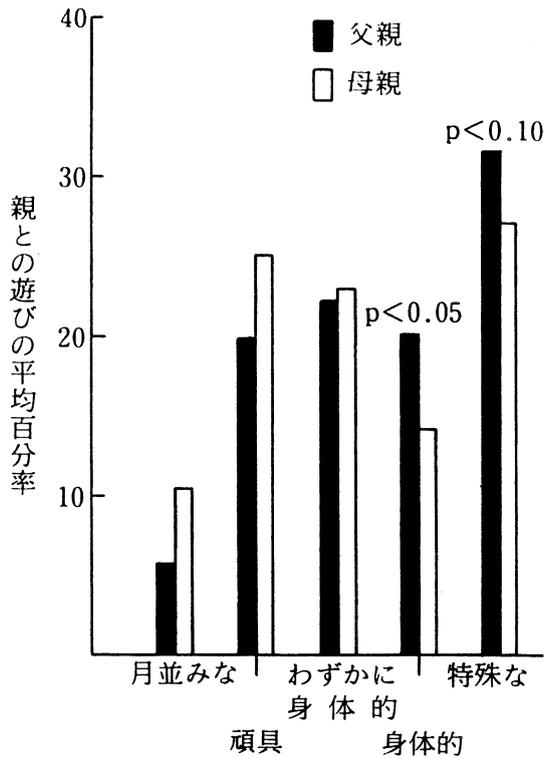


図1. 乳児期における両親の子どもとの遊びの比較 (Lamb, 1976)

り、父親のそれは母親の関わりとは異なる、独自のものであることが明らかにされている。母親の遊びが、①イナイ・イナイ・バアなどの伝統的遊び、②子どもを直接刺激するため、おもちゃを揺らしたり動かす刺激タイプの遊び、③読書など、静的で温厚な遊びであるのに対し、父親の遊びは、①身体的遊び、②両者が同じ遊びを独立して行う平行遊びなど、動的で、独立指向の強い遊びが多かった(図1)。父親が初期から育児に参加することはこうした具体的な関わりを生み、後の関わりを容易にする。また、これまでの幼児期後半(エディプス期)からの父親との関わりを重視する父親論に対して、精神分析の中からも、エディプス期以前の男の子の父親との関係を見直す動きが出ている<sup>14,15)</sup>。こうした論で強調されているのは、

父親は息子を罰し禁止を与えるという側面のみでなく、それ以前にフレンドリーなものとして息子を導き、その理想となる側面をもつということである。これは、父親の罰する面のみが強調され過ぎたことへの臨床的現実からの修正という意味をもっている。

いずれにせよ、乳児期から子どもに自然に関わる若い父親の姿を見るにつけ、既にこうした事態に対応した、現実的な父親論が要請される時代を迎えていることを痛感する。

#### 文 献

- 1) 井原成男：子ども相談の実際—心の基礎づくりから育て直しへ—。日本小児医事出版社，1998。
- 2) Lynn, D. B.: The Farther. Wadsworth Publishing, 1978. (今泉信人・他訳)：父親。北小路書店，1981。
- 3) Parsons, T & Bales, R. F.: Family, socialization and interaction process. Free Press, 1955.
- 4) Mitscherlich, A.: Auf dem Weg zur Vaterlosen Gesellschaft. R. Peiper & Co Verlag, 1963. (小見山実訳)：父親なき社会。新泉社，1988.)
- 5) Federn, P.: Zur Psychologie der Revolution: Die Vaterlose Gesellschaft. Der osterreichische Volkswirt, 1919.
- 6) 林道義：父性の復権。中央公論社，1996。
- 7) 林道義：男と女と (コメント)。毎日新聞 1999年1月24日付け夕刊。
- 8) 井原成男：ぬいぐるみの心理学—子どもの発達と臨床心理学への招待—。日本小児医事出版社，1996。
- 9) 井原成男：親と子の心のカルテ—胎児期から思春期までの臨床心理学—。新興医学出版社，1989。
- 10) 下坂幸三：アノレクシア・ネルボーザ論考。金剛出版，1988。
- 11) 松木邦裕：摂食障害の治療技法。金剛出版，1997。
- 12) 土井弘彦：プリミアをめぐる。imago, 4 (10) : 46—49, 1993。
- 13) Lamb, M. E. (ed) : The Role of the Farther in Child Development. John Wiley & Sons, 1976。
- 14) Blos, P.: Son and Farther. Macmillan Publishing, 1985. (児玉憲典訳)：息子と父親。誠信書房，1990。
- 15) 牛島定信：プレエディパルな三者関係の世界。精神分析研究, 3 (3) : 166—173, 1994。